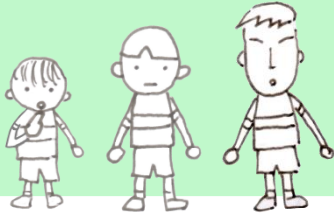


知的発達障害の家族の



日々



大谷 多加志

キャッチアンドリリース?

何事にも、限度があります。親切も度を過ぎると鬱陶しく感じるように、一般的には良いことでも、限度を超えると害になります。弟の場合も、色々なことの区切りや限度が難しかったような気がします。このことを感じたエピソードの1つが、「夏休みのセミ捕り」です。

小学校高学年の頃、弟は一人でセミを捕まえられるようになりました。以前は狙ったところに網を振り下ろせなかったり、そもそもセミがうまく見つけられなかったりしました。そのことを思うと、たいした成長でした。本人も手応えがあったようで、朝から出かけていって、次々とセミを捕まえていました。

ある日、弟が帰ってきた時、虫かごの中は文字通り隙間なくセミでいっぱいでした。かごがいっぱいになるまで、やめ時がわからなかったようです。満足気な弟の顔と、苦し気に悶えるセミの鳴き声が、なんとも対照的でした。“放してあげたら・・・”と声をかけてみると一応そのつもりではあったようで、しばらく眺めて悦に入った後、縁側に座って1匹ずつ放していました。



異変は、その夜に起きました。

セミの鳴き声が聞こえ、ふと目が覚めました。セミの鳴き声はちょっとやさっとのものではない、大合唱です。時計を見ると、夜中の1時。もちろん真っ暗で、セミが一斉に鳴き出すような時間ではありません。両親や、近所の家の人も数人、起き出してきました。

鳴き声は、我が家の庭から聞こえていました。あり得ない時間帯、あり得ない音量のセミの合唱を、両親と近所の人と一緒に呆然と眺めていました。

事の次第はこうです。弟は縁側からセミを放していましたが、かごにすし詰めになれ、疲弊しきったセミたちはろくに飛び立つこともできず、庭の木にかろうじて止まったり、そのまま地面に落ちているようなものもありました。そうして、かごいっぱいセミが、我が家の猫の額ほどの庭に集まることになりました。そのセミたちがようやくすし詰めダメージから回復し、生命力を振り絞って鳴き始めたのが、ちょうど夜中のことだったのでしょう。

事情を知らない人が首を捻る中、近所の人も巻き込んだこの騒動の原因が我が家にあるという、思い当たった真相を言ってもいいのもどうかと悩みつつ、大音量の中、平気で眠り続ける弟を恨めしく睨み付けていました。

振り返ると、このような限度のなさや加減の難しさという問題は、弟の生活の中にずっとあったように思います。家の外では合わせ過ぎて疲れたり、反動で家ではまったく欲求の押さえがきかなかつたりもしていました。色々なことの「適度」の大切さを感じています。